川越で彼女は日本人の恋人を見つけた。このことは、彼女にとってどんなにか心の支えになったことだろうか。やがて彼女はその人の子どもを妊娠する。その後の事情はよくわからないが、とにかく彼女はその恋人を別れることになる。多分、その男が逃げたのではないかと思う。そして彼女は、お腹に彼の子どもを抱えたままで帰国を決心した。この間、彼女が日本に滞在したのは約5年、この期間は彼女にとって短かったのだろうか、長かったのだろうか。定かではないが、彼女の場合は、オーバーステイとして日本の入国管理局に出頭したものと思われる。

Rさんは今、母親の家の隣に小さな家を建ててタイ人の夫と2人の子どもと一緒に暮らしている。夫は日雇いをしたり、魚とりをしたりしながら生計を立てているそうだ。小さな畑もあるという。貧しいながら平和な生活を送っているように思われる。丁度、彼女の家の斜め前に、立派な家が建築中であった。外国で稼いできた人がその家を建てているとのことであった。彼女に「あなたは立派な家を建てられませんでしたね」といったら、彼女は明るく笑いながらうなずいていた。

意外に思ったことであるが、彼女は、日本に対してあまり悪い印象を持っていないようだった。姉が現在日本に住んでいるせいもあるのかもしれなし、また、川越での生活が、彼女なりに満足のいくものだったのかも知れない。彼女はまた日本に行ってみたいといっていた。しかしその時は、正規のパスポートをもって、子どもたちと一緒に行きたいそうである。子どもたちに、自分が行きたくて行けなかったディズニーランドをみせてあげたいのだそうだ。しかし、今のところ、この一家にとって日本はあまりにも遠い。

帰り際に、彼女は、この村にも日本に行ってお金を稼ぎたいといっている娘が何人もいるといっていた。村長さんの娘もそんなことをいっているそうだ。彼女はこのような娘たちに、機会がある毎に日本で経験した自分の恐ろしい体験を話して聞かせるが、彼女らは聞く耳を持たないという。彼女は説得のむなしさに心を痛めているようであった。この村にも、最近のタイの急激な物質志向の潮流が押し寄せて来ているようである。

4）まとめ

量的調査の結果を分析した結果、タイ女性の結果は、他国の女性の結果と比較していくつかの異なった傾向を示していた。たとえば、今回の調査で、タイと同じように対象者数が多かった韓国人女性とタイ人女性を比較すると、タイの女性の方が、来日に当たって多額の負債を抱えている。にもかかわらず、タイ人の女性は、再び日本に戻りたいと答えたものが多い。また、タイ人は売春

を目的として来日するものが多いが、韓国人の場合はそのような人が少ない。さらにいうならば、対象となったタイ女性の年齢は、他国の女性の場合と比較して年齢の高いものが多く、平均で３０歳を越えていた。このような結果から、われわれは、今回の一連の調査では知り得なかった重要な「何か」がタイ国にあるのではないかと考えた。

今回のタイにおける面接調査全体を通しての主たる目的は、以下の３点である。

①タイに特有な「性」と関連する社会・経済的・文化的背景を探る。
②タイにおける女性のトラフィッキングの実態を知る。
③日本で性産業に従事していたタイ女性の体験談から問題点を探る。

われわれは、上記の目的を達成するために、タイ国内においてセックス・ワーカーと何らかの形で関連している施設３ヶ所と、日本でセックス・ワーカーとして働いていた２人の女性を面接調査の対象とした。

具体的には、関連施設としては、①DEP (Development and Education Program for Daughters and Communities、②Empower in Mae Sai、③職業訓練センター (Protection and Occupational Development Centre) の３ヶ所、個人面接としては、ＰさんとＲさんの２名である。これらの調査結果をまとめると以下のようになる。

（１）関連施設について

①　DEP（少女とコミュニティのための教育・支援施設）

この施設は、売春に行く可能性の高い少女を保護し教育することを目的として、１９８９年にタイ人と日本人の２人のボランティアによって、タイ北部のチェンライ県メイサイ郡に設立されたものである。この施設の運営はＮＧＯによってなされている。われわれは、ここの所長さんに面接した。彼の発言を要約すると以下のようになる。

ⅰ．近年のタイ国の工業化のは、労働力の工場などへの集中化現象を生み、従来の主要な産業であった農業を疲弊させた。
ⅱ．このことは、単に農民の経済基盤を混乱させただけでなく、伝統的な精神文化を破壊し、農民は物質的な「豊かさ」を特に求めるようになった。このような価値観の変容は、この２～３０年来のことである。
ⅲ．このような状況の中で、従来は「悪いこと」とされていた、娘をセック

ス・ワーカーとして働かせることに、親たちは大した罪悪感を抱かなくなった。というのは、そのような親たちが増えて来たことによって、彼らの罪悪感が希薄化したからである。

ⅳ．娘の方も、自分の物質的な「豊かさ」への欲求を満たすために、セックス・ワーカーとし働くことにあまり抵抗感を示さなくなってきた。

ⅴ．このように、親も娘も「売春」をすることに対する抵抗感が希薄化すれば、必然的に、彼らはこの仕事でより経済効率の高い場所を探すことになる。彼らが選ぶ儲かる所、それが「日本」であった。

ⅵ．このような「文化」がこの地方で続く限り、日本へのセックス・ワーカーの流失はこれからも続くだろう。

②Empower in Mae Sai

Empower というのは、Education Means Protection Of Women Engaged in Re-creation の略である。あえて日本語に訳すと、「教育が売春をしている女性たちを改革する」とでもなるのだろうか。ここは売春している女性の人権を守ることを主たる目的として活動しているＮＧＯの組織である。

この組織は、売春は職業選択の自由の一つであって、そのことが悪いこととはいっていない。ここでは、現在売春を職業としている女性に、避妊の方法や健康に対する知識、さらに性病やＨＩＶに対する予防法を教えると同時に、タイ語、英語、初等教育、コンピューターの操作なども教えている。

ここに来る女性は任意である。誰も強制はしない。もちろん授業料などは無料である。大して宣伝もしていないようであるが、それでも彼女らの口コミなどで、かなり多くの女性がこの施設を利用しているとのことであった。

③職業訓練センター

この施設は、タイ国の公共福祉局に所属する国立の教育施設である。バンコク郊外の河の大きな中州に位置している。１９６０年に「売春防止法」が制定された後に、年齢に関係なくこの法律に違反した女性の教育の場として設立された。その後１９９６年に、売買春を禁ずる法律が制定されると同時に、この施設は１８歳以下の女児を対象とした職業教育、もしくは矯正教育施設へと発展し現在に至っている。

現在は１５７名の女児が収容されているが、彼女らの経歴は様々である。大多数は売買春禁止法か売春防止法違反か、麻薬等の薬物乱用の罪で収容されたものである。その他にも、だまされて強制的に売春させられたもの、性暴力の被害者、ストリート・チルドレンなどがいる。

われわれのインタービユーウーに答えてくれた女性の教官は、この施設に来る最近の若いタイ女性の傾向を次のようにいっていた。

最近は、タイでは家庭の崩壊が多くなってきた。このことが女の子を性非行に走らせる大きな原因の一つになっている。このことと関連して、タイ国内において、親が子どもを売るというようなトラフィキングが増加している。さらに、娘が親の面倒をみるというタイの伝統的な考え方が薄れてきて、娘たちは、親の面倒をみるためというより、自分が「豊か」になりたいために進んでセックス・ワーカーになるようなケースが多くなっている。

もちろんこれらは困った傾向であって、タイの関係者の頭を悩ませているそうである。

2）元セックス・ワーカーに対する調査

今回の調査では、ガイドの役を引き受けてくれた如田真理氏の計らいで、幸運にも、元日本でセックス・ワーカーとして働いていた、チェンライのノッオー村のＰさんと、サンルワン村のＲさんの２人に面接することができた。

われわれの彼女らに対する質問の要点は以下の通りである。

①どのようにして日本に行ったか。

②日本ではどのような生活をしていたか。

③どのようにしてタイに帰ってきたか。

③ 現在タイでどのような生活をしているか。

２人の日本での体験談をまとめると、以下のようになる。

（1） Ｐさんの場合

Ｐさんは２度日本に出稼ぎに来ている。１度目は２０歳の頃で、この時は「成功」して５年ほどで帰国した。その後直ぐに彼女は２度目の来日をしている。２度目は惨憺たる結果に終わった。この時は千葉県の茂原のスナックで、「性奴隷」のような生活を強いられた。これに我慢できず、彼女は同僚のタイ女性５～６人と共謀して、シンガポール人のママを殺害してしまった。いわゆる「茂原事件」である。その後、彼女は日本の刑務所に服役して３年前に帰国している。

彼女は、１度目も２度目も、タイのエージェントを通して、マレーシアの偽造パスポートで成田から入国している。いずれの場合も３００万円以上の借金をしての来日である。彼女には密入国したという罪悪感が、不思議なほどないようだ。

彼女の日本での生活は、１度目と２度目とでは天と地の差があった。１度目

の「幸運」な経験はむしろ少ないのであって、２度目の悲惨な経験の方が、その悲惨さの程度に違いがあるとしても、かなり一般的なのではなかろうか。彼女は、悲惨な経験のダメージが大きく、帰国後、心理的なリハビリのためにかなりの時間を要していた。

帰国もマレーシアの偽造パスポートで、大した問題もなくタイに入国している。とにかく自由自在の出入国という感じである。

現在は、アルコール依存症の母親の面倒をみながら、内縁の夫と暮らしている。彼女の場合は、再び日本に行こうとは思っていない。

（２）Ｒさんの場合

Ｒさんは３０歳を少し過ぎた年齢である。彼女には子どもが２人いる。１人は彼女が日本にいた時に、日本人の同棲者との間にできた女の子で、タイに帰ってきてから産んだそうである。彼女は、日本人とそっくりな顔立ちをしているので、この村ではきわめて「異質」な小学生である。その下に３歳ぐらいの男の子がいる。この子は、現在のタイ人の夫との間の子どもである。

彼女は１０年以上も前に始めて日本に来た。タイのエージェントに２００万円以上の借金をして、成田から入国している。この時のパスポートは、マレーシアの偽造パスポートである。彼女には、日本人と結婚して大宮に住んでいる姉がいる。このことが、彼女と日本との間の心理的距離を縮めるいたようだ。

彼女が「配分」されたところは、甲府市内のとあるスナックであった。この時の条件は、６ヶ月無給で働き、その後は自由であるというものであった。一見、この条件は好条件のように見えるが、しかし、この店のタイ人のママの管理はかなり厳しかったそうである。彼女らには、ほとんど「自由」が与えられなかったそうだ。たとえば、もちろん客は選べなかったし、６人の仲間全員の１日の食費が１０００円。何時もお腹が空いていたという。

この店で３ヶ月働いた後に、彼女はこの店から逃走し姉の家に隠れた。幸いに、日本のヤクザからの追跡はなかった。その後、彼女は川越市内のスナックで約５年間働くことになる。給料は少なかったが、セックス抜きの平和な生活だったようだ。この間に、彼女は日本人の恋人と出会い同棲する。間もなく妊娠するが、男は去って行った。お腹に子どもを抱えたまま、彼女は帰国を決心する。オーバーステイで入国管理局に出頭したようだ。

立派な家は建てられなかったが、彼女は現在、日雇いや魚つりで生計を立てているタイ人の夫と２人の子どもと一緒に、小さな家で平和に暮らしている。